

ボルヘスと私、と野谷先生

高山 宏

野谷文昭氏の方は知らないことのはずだが、ぼくは野谷先生に大きな恩義がある。この機会にそのことを述べて御礼にも替えよう。ひょっとしたら日本の英（米）文学界が示して然るべき恩と御礼と言って言えなくもない。それは大袈裟かもしれないが、ボルヘスを介して英文学史全体が見通し良くなった、少なくともそのひとつのきっかけを野谷先生がつくったと言える。そのお話を。

舞台は月刊誌『ユリイカ』の、数字九並びで記憶に残る一九九九年九月のボルヘス特集誌上の対談で、多分その号の宰領者たる野谷氏が対談相手にぼくを選んでくれた、その対談「火と代数の文学」である。それまでぼくにはまとまってボルヘスを論じた仕事はひとつもなく、「ボルヘス学会」から見れば何者でもなかったのだから、今でも氏に「何故なの」と尋ねてみたい気もする。

ほとんど視力なしという条件やら、一寸だけ風変りな博学趣味やらで、よく何故いかにもというボルヘスをやらないのと言われていたし、翻訳で読めるものはほぼ読み知ってもいて現に相当近い、というか似た相手だと感じていた。ボルヘスの場合、翻訳で読めるといふ時、相手は相当量の英語版でもあって、英訳されていた部分は全て読み知っていた。

日本へのボルヘス紹介の尖兵が故篠田一士氏であることは皆知っている。仏訳されたボルヘスからの重訳であるにしる、こんな作家がいると逸早く伝えた着眼、目利きぶりには深い敬意を表さねばならない。文学起業家シノダとしては最大の鴻業であるに相違ない。

ところで、というかところが、というか、大なる敬意を表すべきこの御大に侮蔑と敵意を抱くようになるつまらぬ事態が生じて、氏の衝撃的な死にいたる十有余年という貴重な時間、大人気ない最低の没交渉関係となつて了い、大学同僚なのに思い出せる言葉のやりとりだけで十回あるかないか。その辺、いろいろな所に書いた。

その十回あるかないかの一回がボルヘス『伝奇集』の篠田一士訳（集英社）に関するやりとりで、『『ドン・キホーテ』の作者、ピエール・メナール』をボルヘス全作品のメディア論的位置付けへと開くはずのライブニッツの『カラクテリス・ウニウエルサリス』を「普遍的性格論」と訳しておられるが、この「カラクテリス」は寧ろ、キャラクター広義の「記号」とか「文字」とか訳すべきもので、今ちょうどライブニッツブームだし、いろいろ言われますよ、次の版では是非直された方がと「進言」したら、無学の若造にボルヘスの何がわかると一喝された。別訳者の岩波文庫版『伝奇集』の方がどうなっているか、こわく

て見ていないが、篠田訳は何度か版を改めるたびに、しかしずっとこの過ちを繰り返した。「若造」から言われたのを無視なら可愛げだが、やがて氏の尊敬するウンベルト・エーコの『完全言語の追求』が邦訳されるにいたって「普遍的性格論」がいかにも正確でなかったか愕然とされることもあったはずだが、篠田氏すでにこの世になかった。

ライプニッツが近代に媒介し、そのプロセスの一六六七年にコンピュータ言語（0／1バイナリズム）さえ生むことになるユニヴァーサル・ランゲージ・スキームズ（普遍言語構想）が二世紀半ほどしてシンボリック・ロジックを生むが、マラルメ、ヴァレリーがらみのこのこれまた広義のシンボリズム、サンボリズムもボルヘス賞玩のエリアである。『伝奇集』中の訳は、もはや当然のように「象徴的論理学」となっていて、これも「記号論理学」でないとならぬと何のことか分かりませんね、と序でに申し上げたのに、結果は同じことだった。

こういう流れを全て把握した上で、キャラクターに関わる問題を二十世紀に開いたのが『哲学事典』の大フリッツ・マウトナーである。一緒に受賞したベケットも、ボルヘスもマウトナーの仕事を最大の靈感源としていることも周知。それが篠田訳では「モースナー」。非常に偉大な存在という扱いをボルヘスがしているものだから、はてさてそのモースナーを知らないで自分はボルヘスを読んでいるのか、とか思って英訳本で欧文綴りを見て、シノダの奴！と、これは破顔一笑するしかなかった。

それやあれや、大篠田がボルヘスに見た「文学」とは何だったのだろう、と一九九九年九月当時、ぼくはすっかり、このレベルで回っているボルヘス学会／学界に一切関心がなかった。そこに野谷氏との対談の話。自分では何となく相当分かってしまったと勝手に思い込んでいたボルヘスをめぐって、当時最強のボルヘス・エキスパートと目していた氏とやりとりしなければ、という思い詰めた気合で、手に入るボルヘス作を片はしから読み直した。そしてこの短期間（一ヵ月！）のボルヘス再読を介して、かつて一度も考えたことのない高山版＜小＞英米文学史記述の構想が固まった。問題のボルヘス対談の翌二千年に出した『奇想天外英文学講義』がそれである（当時は講談社メチエ叢書）。ぼくの本としては珍しくよく売れ、講談社学術文庫に『近代文化史入門』なる超ダサッ！タイトルで入っているが、この生みの親こそ、だから、対談相手にぼくを選んだ刹那の野谷文昭である、ということになる。大恩義、である。

自分で言うのもなんだが、この本はひとつの画期である。何十年後にどういう評価を受けているか知らないが、二十世紀に可能な英文学研究のひとつの整理、というか精算をしたつもりだ。端的に言えば司教ジョン・ウィルキンズの『真正言語論』を取り込むと英文学史がどう変り、どう見えてくるかという一点から出発したのであり、先のコンピュータ言語の出発もまさしくそうだが、一六六〇年、清教徒革命終了の十年間が二十世紀に向け

での「新しい」英文学像の起点であるという着眼だった。そこで言語観、ひいては文学観、ひいてはメディア観が一変するのだが、そこを突いてから展開していく英文学史は、でなければ究極書とされても良いピーター・コンラッドの『エヴリマン英文学史』でさえ全然手付かずだった。ボルヘス自身の『イギリス文学講義』も落第！

ボルヘスの今でこそ画期とされるエッセー「ジョン・ウィルキンズの分析的言語」は『異端審問』（一九五二）の中の白眉である。中村健二氏による邦訳刊行は一九八二年。これを読んで、やはりうじうじと周辺をなぞるばかりでラチのあかなかつたぼくの近代「カラクテリス」論は一挙にはずみがついて、すぐ『メデューサの知』（一九八七）に結実した。

キーはロンドン王立協会である。十七世紀初め以来、地下に潜行してきた薔薇十字団が一挙公然化し、あまつさえ勅許をえて、近代最大最新の理系アカデミーとなったもの。その初代総裁と目されるのが（宗教上の理由で総裁にはならなかった）ジョン・ウィルキンズであり、その主著がリアル・キャラクター、即ち「真正言語」論である。一六六〇年代の英仏を席捲した普遍言語実現の運動は文学から「曖昧さ」や「パラドックス」を除けと主張する理系学者のグループが推進した。まだ誰にも言えていないが、「トレーン、ウクバル、オルビス・テルティウス」で幻想の国家をつくり出す謎の学者集団とは端的に十七世紀薔薇十字系のこれら理系学者たちの運動を指すもの、と読めてくるのである。「オルビス」と聞いて初学時、ぼくなど、そうした薔薇十字系知性集団の領袖、ヤン・コメニウスの代表作たる『オルビス』を連想しないわけにいらなかった。一六六〇年代を転換点とするこうした言語と表象をめぐる動きの結果、謎の国家が狂った百科全書の中に出現するわけだが、そうなる又何ということはない、その幻の国家こそ「近代」というに他ならないだろう。そういう表象をめぐる新しい動きを一六六〇年代英国を舞台に明るみに出したのは、たとえばジェイムズ・ノウルソンの『英仏普遍言語構想』であって、一九七五年刊。ジョン・ウィルキンズをただの永久機関研究の失敗者の地位からコンピュータ言語研究へのとば口の地位へとアップさせたのだが、その二十年も先にそれをやってのけていたのが「ジョン・ウィルキンズの分析的言語」である。しかもミッシェル・フーコーが表象論の古典、『言葉と物』（一九六六）をボルヘスのこのエッセーを枕に語り始めたその刹那に、文学研究と哲学研究が＜表象＞の営みということで何間然するところなくなった。

王立協会の言語観では十七世紀の所謂バロック的文学は曖昧・逆説嗜好を批判されて、てき面に消滅する。その必死の名残りが考証文学の華たるサー・トマス・ブラウンのまさしく迷宮的文体、アレフそのもののエッセー群である。ミルトンやマーヴェルをやる人間はいるのに同時代のブラウン卿をやる人間がいないのは英文学研究の過失だね、と生前、仏文学者の澁澤龍彦氏はいつもこぼしていた。『言葉と物』刊行の一九六六年にはフランセス・イエイツの『記憶術』も出、そしてロザリー・コリーの『パラドクシア・エピソード』

カ』も出た。因みにグスタフ・ホッケの『迷宮としての世界』の邦訳もこの年に出て、「記憶術」も「パラドックス」も「マニエリスム」の範疇に入るという壮大な図式がこのあたり、一挙に出来上る。「アレフ」が「ザヒール」に化す、「魔術」が「表象」に克服され、という「近代」なる問題がこうして総体として「マニエリスム」の語で語り得る、バロックと言う代りに「マニエリスム」と言ってみると、ボルヘス・マニエリスト論がなおいくらかも可能では、とぼくは野谷氏を相手に喋り続けた。

笑いながら、『ユリイカ』の今特集にボルヘスの「思考機械」論を『家庭』誌から訳して入れてありますよと野谷氏は仰有った。雑誌が出て急いでのぞいてみると、ズバリ、ラモン・ルルスのマニエリスムをボルヘスが縷説していた。先生は黙ってぼくの数歩前を行っていた！ 野谷文昭とはそういう御仁である。